

# チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局  
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号  
Tel·Fax 093(681)1780

口座番号 01770-1-65328  
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1995年10月27日

No.

31号



日本とベラルーシの子どもたちは会場で友好の握手を交わした  
(「パトローネ」より)

# チェルノブイリ通信No. 31号を お届けします

ベラルーシからの子どもたち来日、第5次チェルノブイリ調査団の派遣と大きな行事が続き、息をつく間もなくいよいよ総会が近づいてきました（総会については最終頁を！）。事務所のハデな散らかりようを見てもその忙しさがわかります…単に片づけの下手な人達ばかりの集まりとも言われますが…。

さて、今回の通信は報告することが盛り沢山です。調査団のチェルノブイリの最新報告は、2回に分けて掲載し

ます。じっくりお読みください。

## 今回の内容

- 作文集を書いた子どもたちの来日
- 第5次チェルノブイリ調査団報告
- 作文集の最新情報「雪だるまニュース」
- 事務局より
  - ・ 広川隆一カレンダー、ロシア語版作文集の販売について
- インフォメーションコーナー
- 総会のご案内

…となっています

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」を書いた  
子どもたちがベラルーシから来日

チェルノブイリ原発事故で被災した子ども達の作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた～子どもたちのチェルノブイリ～」の作文を書いた子どもたちのうち4名と社会エコロジー同盟チェルノブイリ（チェルノブイリ支援運動・九州とサナトリウムを共同運営しており、また作文を募集した団体）議長のワシーリ・ヤコベンコさんが来日しました。これはチェルノブイリ支援運動・九州が招待したものです。一行は、東京と九州各地の出版記念交流

会に参加しました。また、折しも時期が8月上旬であったため、ベラルーシのチギル首相から村山首相にあてた平和へのメッセージを持ってきており、首相官邸で古川副官房長官に手渡し、接見を行ったり、広島・長崎市長に記念の絵を贈呈するなど、平和のメッセンジャーとしても盛りだくさんのスケジュールをこなしてくれました。

マスコミにも何度も取り上げられ、チェルノブイリ原発事故のことを多くの人たちに知ってもらうことができま

した。どの集まりも受け入れ担当になった会員さんの思いが込められていました。また、多くの心に残る出会いも生まれました。

支援運動・九州の各地窓口の皆さん、本当にご苦労さまでした。そして来日したリュウダ、オリガ、エレナ、ピクトル、そしてヤコベンコさん、お疲れさまでした。

以下、来日の時の模様をご報告します。

### 8月2日 成田着

・栗原小巻さんの招待でホテル泊

当初のスケジュールを聞かれた女優の栗原小巻さんの申し出と援助により、空港近くのホテル（ホリデイ・イン東武成田）で休息させることになった。来日一行と東京のスタッフ、通訳の分を含めたすべての宿泊料を払っていただいた。また、各部屋にフルーツバスケットのプレゼントがあり、長旅で疲れていた子どもたちも元気になった。

### 8月3日 東京

・東京タワー見学

東京タワーの関係の方々の歓迎を受けた。無料入場券を手配していただき、日本の高校生なども含めた総勢27人分、総額5万円以上もの招待をしていただいた。

・広島市東京事務所

一行が持参した2枚の絵のうち、1枚を原爆投下50周年記念として広島市に寄贈したいとのことだったが、日程から広島市を訪問するのは無理だと

いうことになり、広島市東京事務所に持っていった。絵の内容は「スウィスロッチ河畔にて」という、サナトリウム九州の付近を描いたもの。一行には広島市からの記念品をプレゼントされた。

・銀座プランタンデパートでの葉祥明原画展見学

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」のイラストを描いてくださった葉祥明さんの個展に行く。葉さんと対面。

・首相官邸にて古川副官房長官と接見

ベラルーシ共和国チギル首相の村山首相宛て親書伝達式が行なわれた。村山首相は内閣改造直前であったため古川貞二郎内閣官房副長官との会見となる。約1時間の会見となった。古川副官房長官より、今後も政府として、今まで以上のチェルノブイリ支援を続けるとの発言があった。

・交流会（文京区シビックセンター）

大人、高校生合わせて50人以上の参加。関東にある他のチェルノブイリ支援団体の人たちも駆け付けてくださった。ベラルーシの一行の自己紹介のあと質問、グループに分かれての質問と交流。ベラルーシから歌、ブイソフ君がギター演奏。

### 8月4、5日 長崎

・長崎市長と接見

持参したもう一つの絵を長崎市長に手渡した。

・原爆資料センター見学

・交流会（泉動労福社会館）

### 8月6、7日 北九州

・交流会（国際村交流センター）

約80名の参加。「わたしたちの…」の本にある詩に曲をつけた歌の披露も。

・市内見学

前日の交流会に参加した高校生たちと海水浴や市内観光。レストランでは話しがはずみ、バスに乗り遅れそうになるという一幕も。

### 8月8日 熊本

・山の内小学校にて交流

6年3組の児童に話をする。一緒に習字もした。お昼はお母さん方の手作りのごちそうで、煮物やおにぎりもおいしそうに食べていた。食後、ドッジボール。

・交流会（ヨーズギャラリー）

会場は熊本出身の葉祥明さんのギャラリー。予想の2倍以上の40名の参加者があり、会場はいっぱいだった。

### 8月9日 熊本→大分

・阿蘇観光、海水浴

ベラルーシでは絶対見ることでできない火山に歓声があがった。

### 8月10日 大分

・マリンパレス（水族館）、高崎山

ベラルーシには海がない。猿もいない。一行の期待の見学でした。

・東陽中学にて郷土料理の調理と試食

・交流会（九重自然の家）

### 8月11日 東京

・東京リーガロイヤルホテル招待お別れ晩餐会

会食、朗読／エレナ、フォークソング／ピクトル、独唱／リュドミラ、詩の朗読・「Amazing Planet and Amazing our Lives!」／葉祥明、11弦ギター演奏／辻幹男、合唱

### 8月12日 モスクワへ

## <各地からの感想>

「ベラルーシ」へのパイブレーション—東京、高校生交流会について—

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の発売前のゲラ刷りにであった高校生達が、4人の使節団を迎えるにあたって、8月、ボクの働く原宿の福祉センターで学習会をもった。河上さんとボクは、東京集会（8/3）は、若者を中心とした相互の出会いの場としよう、と企（もく）ろんだ。現地から帰ったばかりの茨城大の久保田謙さん、原子力資料情報室の伴英幸さんの話は、意識の高い彼、彼女らを満足させるものだった。当日の司会は門間直輝君がやり、あらかじめ用意した質問を交わり、また3つのグループで（ひとつは大人）話し合いを深めた。

何かこのままで帰りたくないねに全員うなずき合って、次回は10月29日となった。ボクらの将来を考えあってゆこうよと、環境のこと戦争のこと、

そしてチェルノブイリの負債を背負ってゆく、現地の仲間との交流を続けてゆく、その為何をするか学びつづけよう、と話されている。

(東京 大友)

※東京には支援運動・九州の東京窓口があります。事務局スタッフだった河上雅雄さんが転勤で東京に行って以来、担当をしてくださっています。大友慶次さんは北九州で事務局スタッフをしている大友泰樹さんのお父さんでもあります。

#### チェルノブイリ支援運動・九州事務局の皆様

きのう、東京での交流会に参加させていただきました。写真とかがあればわかると思いますが、わたしはリュウダと大の仲良しになりました。2人でずっと手をつないで歩き、別れる時には泣いてしまいました。

わたしは作文集の原稿を読んだ感想に、“チェルノブイリの友達にいつか会えることをお祈りいたします。”って書いたんですよ。……その夢がない、こんなに仲良くなれました。すごいことだと思いませんか？

日本語も英語もロシア語も通じず、話すには通訳さんか、英語のわかるオリガといなければなりません。すごくもどかしかったです。わたしはまだ高2ですが、大学生になったら絶対、ロシア語を勉強してベラルーシのリュウダに会いに行きます。

では、そちらでの交流会も成功しますように。

(参加者 東京 高2)

#### 出版記念交流会に参加して

1986年4月26日 この日を境に彼らは大きな苦しみと深い悲しみを背負って今日まで生きてきました。9年経った今でも、それは消えることはないでしょう。淡々と話すベラルーシの子どもたちの言葉ひとつひとつが魂の叫びであり、肉体の叫びであるように聞こえました。

会場の女子高生から「将来になりたいものは？」そして、「将来への不安は？」という質問に、彼らは「ジャーナリストになりたい」「医者になりたい」と答え、将来の不安は無いというのが4人の揃った意見でした。私はこの答えを聞いて、恐るべき運命に押しつぶされるのではなく、前向きに生きていく子どもたちの力強さのようなものを感じました。

最後に4人はベラルーシの歌やロシア民謡を数多く歌ってくれました。音楽は言葉の壁を越えると言いますが、会場にいた多くの人がそうであったように、私の胸にも暖かいものが残りました。

(参加者 北九州 渡辺)



# 第5次調査団報告

## 《主な訪問目的》

- ① 医療機器、医薬品（ビタミン剤、かぜ薬、貧血の薬）とサナトリウム運営基金5万ドル、作文集印税1万ドルを届ける。
  - ② 子どもたちがヨウ素不足のためワカメからヨウ素を摂取する試みとして、ワカメ料理を指導する。
  - ③ ベラルーシ国内での作文集PRのための日本語版作文集贈呈式への出席。
  - ④ サナトリウム九州の運営や会計報告などについて詳しく話し合う。
  - ⑤ スタディツアーに向けての下調べ
  - ⑥ 学校サナトリウム（希望21）訪問
  - ⑦ 汚染地の訪問
  - ⑧ チェルノブイリ原発訪問
- ※ ②については時間が無くて指導できませんでした。カットワカメは渡してきました。その他については報告の中で触れていきます。

## 《メンバー》

- 団長・中村隆市（事務局・チェルノブイリ支援コーヒー販売元・福岡）  
・河野近子（グリーンコープ連合・放射能汚染測定室運営委員・大分）

・大友慶次（チェルノブイリ連帯基金、東京事務局長・東京）

通訳・菊川憲司（チェルノブイリ支援運動・九州、顧問・福岡）

## 《日程》

### 9月24日

- ・14時 成田出発 →17時（モスクワ時間）モスクワ着
- ・夜行列車にてミンスクへ向け出発

### 9月25日

- ・8時（ミンスク時間）ミンスク着
- ・同盟事務所にて打ち合わせ後、サナトリウム・キュウシュウへ
- ・16時 作文集贈呈式 その後一人芝居観賞

### 9月26日

- ・Aチーム サナトリウムで子どもたちにインタビュー
- ・Bチーム ナジェージダ（学校サナトリウム・希望21）
- ・ハティン見学
- ・夜 モズイリへ向け出発（全員）

### 9月27日

- ・ナローブリャ市民病院
- ・ナローブリャ地区議長と会見
- ・モズイリ子ども病院
- ・モズイリ民芸品製作所と自由市場見学
- ・チェルノブイリ同盟・モズイリ支部訪問
- ・アンサンプル・ラドニツァ パレ

## スカヤ・ゾーラチカと交流

9月28日

- ・Aチーム 原発見学
- ・Bチーム リューダの村訪問

9月29日

- ・モズィリ市役所訪問後ミンスクへ
- ・同盟事務所にてサナトリウムの今後に向けて会談
- ・夜行列車にてモスクワへ

9月30日

- ・21時 モスクワ出発

10月1日

- ・12時 成田着

### 第5次チェルノブイリ調査団報告 河野 近子

#### 《24日》

予定では24日早朝の便で福岡から成田へ向かうはずでした。ところが遅悪くちょうど台風が接近し九州を直撃しそうな様子になってきたため、万一のことを考えて、急遽23日夜の便で羽田に飛ぶことに変更。中村さん菊川さんとともに、菊川さん母子の見送りを受けて出発です。

その夜は日暮里のビジネスホテルで泊り、24日朝の電車で成田へと向かいました。おかげでなんとか台風に巻き込まれることもなく、一時間遅れの14時、成田で合流した東京の大友さんと4人、一路モスクワへと向かうアエロ

フロート機上の人となることができました。やれやれ一安心。

汗ばむほど蒸し暑い成田から飛び立ちましたが、機内で着替えを済ませ、9時間余りの飛行を終えてモスクワ・シェレメチボ空港に降り立ったときには、真冬のいでたちに变身していました。

現地時間の17時（時差が6時間ですから日本では23時です）到着。入国手続きにやたらと時間がかかりましたので、チェルノブイリ救援・モスクワ連絡事務所から迎えに来てくれていたプロホロフさんの車に急いで支援物資を積み込み、モスクワのペラルーシ駅へと直行です。空港からずっと気になっていた空気の汚れは、ペラルーシ駅でも同じ。「大気汚染が進んでいるのかな」と心配になりました。

異国情緒の漂う（外国に来ているのだから当たり前ですよ）夜の駅で待つことしばし、私たちの乗る列車がホームに入ってきました。改札口などなくだれでもホームまで行けるこの国では、キップは、列車に乗り込むとき乗り口に立っている車掌さん（と言うのかな？）に見せて乗るのです。乗り込むときがさあ大変。日本のように、ホームの高さを列車の入り口の高さに合わせて造っていないので、1m以上も上にあるデッキに、タラップを上っていかねければなりません。ハイヒールやロングドレスの女性、老人や障害を持つ人などは困るだろうな…などとちょっと心配しました。ダンボール14箱分の支援

物資を、男性たちが手際よく運び込みます。私はといえば、いつも荷物番。この国では、番人がいなければ、すぐに荷物が消えてしまうのだそうです。（物騒ですね！）無事荷物を積み終え、夜行列車の出発です。モスクワから大陸を横断しヨーロッパまで延びているこの列車は、寝台列車です。それぞれが、二段ベッドが左右に付いている四人部屋になっています。男性三人は荷物とともに一部屋に、モスクワから加わった通訳のイリーナさん（女性）と私は、見知らぬ外国の男性二人との相部屋です。ちょっと不安な思いでそれでもすぐに眠りにつき（私は、いつでもどこでも眠れるのが取り柄なのです）、心地よい揺れに夢とうつつを行き来するうち、朝を迎えました。

## 《25日》

モスクワからはるばる 680 Kmの旅を終え、朝 8 時、懐かしのミンスク（ベラルーシの首都）駅に到着。モスクワとの時差が一時間なので、モスクワ時間では 9 時です。ヒンヤリと冷たい朝の空気のなか、ヤコベンコさんとセルゲイという若者（同盟の職員）が出迎えてくれ、再会を喜びあいました。ホーム横まで乗り入れた車に荷物を積み込み、例のごとく改札もなにもないままミンスクの街へ、実にのどかなものです。

ほどなく同盟事務所に到着。でも一昨年来た時の建物ではありません。

聞くと、一ヶ月ほど前にこの場所に転居したとのこと。農業大学の建物で、一部を借りているのだそうです。同盟副議長のレオニンさん、会計のおばあさん、他二名のご婦人、そしてポイコさんが待っていてくれました。

三人のご婦人が支度してくれ、簡単な朝食です。おいしいチーズに黒パン、インスタントスープ、そしてトマトと、赤や黄色の巨大なピーマン。肉厚の大きなピーマンは、生のままかじると甘くてとてもおいしいのです。野菜の少ないベラルーシでの、この季節の貴重なビタミン補給源なのでしょう。腹ごしらえを済ませ、日程の打ち合わせや、持参した支援金 5 万ドルの受け渡しなどの事務処理を全て終え、今夜の宿舎、スタイキへと向かいました。

ミンスクの郊外、スピスロッジ河畔の静かな森のなかにあるスタイキ。サナトリウム・九州がここに 있습니다。このスタイキは、旧ソ連時代オリンピック選手のリハビリ施設として造られたものです。この建物の一部を借り受けて、私たちのサナトリウム・九州を開設しているのです。ヤコベンコさんのお連れ合いラリサさんが、白衣で出迎えてくれました。彼女はサナトリウム・九州の副主任医師。一昨年、パレスカヤ・ゾーラチカの子どもたちに付き添って日本にやって来た女医さんです。今年の夏作文集出版を記念して日本に招いた、4 人の子どもたちの内ただ一人の男の子ピクトル君も、カメラマンのお父さんとともに、私たちに

待っていてくれました。そのほかにも、今夜の作文集贈呈式に出席するため各地から集まってきた子どもたちの何人かが、興味深そうに集まってきました。彼らはここのゲストハウスに泊まって、今夜の贈呈式を待っていてくれるのです。私たちもラリサさんに、支援物資として持参した沢山の薬を渡したあと、今夜の宿舎となるゲストハウスに荷物を取めました。そして遅い昼食のあと、再度作文集の贈呈式会場があるミンスクの街へと向かいました。

作文集の贈呈式が行なわれる青少年文化宮殿の大ホールには、すでに沢山の人々が待っていました。作文集の子どもたち28名とその家族、そして科学者やジャーナリスト、エコノミストなどです。舞台には花が飾られ、人々の顔も晴れがましく見えました。テレビカメラも何局か来ていて、華やかな雰囲気包まれています。

ヤコベンコさんたち関係者とともに、私たちも正面の席に座らせて贈呈式の始まりです。ヤコベンコさんたちの挨拶が続き、いよいよ、視察団の団長中村さんの番です。彼は私たちを代表して、日本で作文集を出版することになるまでのいきさつを説明し、とても素敵な心にしみる挨拶をしてくれました。スタイキでの昼食のとき早々と自室に引き揚げたと思ったら、この原稿を書いていたのですね。

会場からの発言も沢山とび出し、チェルノブイリ問題の意見交換会のよう。突然私にまでマイクが回ってきて、ぶ

っつけ本番で挨拶させられてしまいました。日本語版の作文集を参加者にプレゼントして終了。その後会場を小ホールに移して、チェルノブイリをテーマにした一人芝居「狭い道」の上演です。シェシュケビッチさん主演の力作ですが、少々難解で、私たちには絶望的な雰囲気伝わっただけに終わりました。

## 《26日》

この日は2チームに分かれての行動です。Aチームはスタイキに残り、作文集の子どもたちと、サナトリウム・九州の子どもたちへのインタビュー。中村さんと、通訳のイリーナさんがこの役を担いました。沢山の子どもたちをビデオカメラに記録することができたそうですので、編集出来たら、きっと皆さんにも見ていただけることでしょう。

Bチームは、ミンスク郊外の学校サナトリウム・ナジェージダ（希望21）の見学に出かけました。このサナトリウムは、ドイツの市民団体が、チェルノブイリの子どもたちの心身の保養を目的に、ベラルーシ政府との共同事業として開いたものです。自然の豊かな森のなか、7ヘクタールの国有地に真新しい建物が点在しています。しゃれたデザインのそれらは、子どもたちの宿舎、教室棟、医療棟、食堂棟などで全て新築。ボイコさんの交渉で現われたスラリとした長身の素敵な女性は、

ナジェージダの先生。課外授業担当で、新聞作りを指導しているのだそうです。この先生の説明によると、ナジェージダは昨年9月に開所したそうです。ドイツのチェルノブイリ支援活動のひとつとして、市民団体から寄附を集め、ベラルーシ政府との共同事業の形で進めているとのこと。汚染地の12才から14才までの子どもたちをクラス毎に2ヶ月単位で受け入れ、正規の授業はもちろん、課外活動として、文化やスポーツなどさまざまな分野での指導もしているということです。この事業のためのスタッフは80人（スゴイ！）、年間経費は100万マルク。現在は180人の子どもを取寄していますが、一年半後には、300人まで増員予定とのこと。

一応の説明を受けたあと、いよいよ見学です。まず教室棟。ゴメリ州とモギリョフ州から来た子どもたちが、楽しそうに授業を受けていました。ベラルーシ語の授業中で、にこにこ顔の子どもたちが、興味深そうな様子で私たちを歓迎してくれました。

この教室棟には、図書室、職員室、ピアノやエレクトーンの揃っている音楽ホールと、全て明るい光に溢れた木調の造りです。医療棟には高価な医療機器が揃い、優しくそうな女医さんが、子どもたちの心身の健康をしっかりとチェックしています。食堂棟もかわいいテーブルクロスやカーテンで飾られ、全員が一緒に食事できるだけのスペースが確保されています。厨房は、最新の設備の調理器具とかわいい絵柄の食

器…、本当に至れりつくせり。

子どもたちのプライベートな生活の場生活棟は、家庭のぬくもりを基本にしているとのこと。キッチンを備え付けた談笑室や手芸室、くつろぎのリビングに子どもたちの手芸作品でいっぱい、展示ホール…、全てが光いっぱい、明るい木調づくり。

明るい光に溢れた建物の全てが、女性らしい心遣いの行き届いたインテリアで飾られ、まるでおとぎの国のよう。女性中心のこまやかな愛情が溢れ、汚染地の荒んだ生活で傷ついた子どもたちの心と身体を、丸ごと包み込んでくれる夢のような世界です。ここで過ごす二ヶ月の間に、子どもたちの心身はどれほどにか癒されることでしょう。

広河隆一さんのグループなど、日本からの援助も沢山寄せられているとのこと。子どもたちから「ありがとう！」とお礼の言葉をもらいました。私たちのサナトリウム・キユウシュウにとっても、勉強になることが沢山ありました。これからの運営に大いに参考にさせてもらいたいですね。

おとぎの国のようなナジェージダをあとに、ハティンへと向かいます。第二次大戦のとき、ドイツファシスト軍に虐殺され全滅したハティン村が、永くその記憶を人々の心に刻むため、「記念公園」として残されたところです。ベラルーシという国は、ドイツファシストのロシア侵攻の時その道筋に位置していたため、多くの村々がその犠牲になり、村人が全員虐殺された村

が数えきれないほどあったということです。このハティン村も村人全員が教会に詰め込まれ、生きたまま焼き殺されたということです。今は静かな風の吹きぬける草原の家々のあとに、先端に鐘を付けた塔がそれぞれに建てられ、犠牲になったその家の家族の名前が刻まれています。ベラルーシ全体で、209の町と9200の村、223万人の罪のない人々が、犠牲となって倒れていったということです。この人数は、なんと当時のベラルーシ人口の四分の一にものぼるそうです。

今も人々の無念の死を悼む鐘が5分おきに鳴り続け、平和を願う聖火がこの丘に燃え続けています。平和な村を突然襲ったファシズムの嵐…、人間の愚かさや悲しさを改めて実感するひとときでした。

(次号へ続く)



## 第8次支援物資

(第5次調査団がベラルーシに持参)

ビタミン剤、貧血の薬、かぜ薬

…モズイリ市子ども病院

ナローブリャ市立病院

サナトリウム・九州

放射線医学センター付属病院

心電計

…モズイリ市子ども病院

サナトリウム運営資金5万ドル

…サナトリウム・九州

作文集印税1万ドル

…チェルノブイリ同盟

・8月ヤコベンコさんに持ち帰ってもらったもの

エコセンサー

…モズイリ市子ども病院

サナトリウム運営費1万ドル

…サナトリウム・九州

---

※来日したピクトル君のお父さんからの手紙です

## 豊かで貧しいベラルーシ

---

ベラルーシ共和国はヨーロッパにある。70年の間、共産主義の圧制下にあり、ファシズムの占領下にあったこともあった。現在はチェルノブイリの放射能に焦がされている。

私の祖国ベラルーシは自然が豊かな国である。そして、人々の理性は貧弱なのである。人々を救い治療すべき人が、冷淡な心で人々を殺している。私の孫のジーマ・ワシレンコは生まれてまだ半年だった。1994年のことである。1994年7月2日、彼は救急車でクリチーフ地区病院に運ばれた。だが、医者ポビヤールジンは検査もせず、レントゲンもとらず勤務から帰ってしまった。彼は保健省の1歳以下の乳幼児に対する緊急援助の政令を守らなかったのである。ジ-

マは医者への冷淡な態度が原因で死んでしまった。この医者は最高ソビエト（国会）の人民代議員選挙に立候補した。また立候補するそうである。わが国では犯罪者が裁かれないでいる。こういう人々が代議員になっているのである。ジーマ・ワシレンコの写真を見てください。彼が死んだのはチェルノブイリのせいではなく、医者で犯罪者であるポピャールジンの冷淡さによってである。

われわれはヨーロッパの中心、ベラルーシに住んでいる。そこでは金持ちがすべてを支配し、貧乏人は正しく生きている。これらの写真は私が撮ったものである。人々は生きるために働いている。ここには素晴らしい自然があり、素晴らしい子どもたちがいる。子どもたちに未来があるのだろうか。

P. S. 私がチェルノブイリの大地で撮った写真が無駄になりつつあります。出版する可能性もありません。私は貧しい国の貧しいジャーナリストです。一ヶ月に60万ルーブル、50米ドルの収入しかありません。

私の息子ピクトル・ブイソフは日本にきました。彼はチェルノブイリについての作文を書きました。「黒い風の跡」（「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の原題）が日本で翻訳されました。その本の中に私の写真が使われています。

ワレーリ・ブイソフ

（1993年ベラルーシジャーナリスト同盟賞 受賞）

---

## チェルノブイリ事故から10年 スタディツアーのお知らせ

---

チェルノブイリ支援運動・九州では、チェルノブイリ原発事故から10年の企画として、チェルノブイリスタディツアーを来年の夏休みに企画しています。これは、作文集の出版やベラルーシからの子どもたちの来日に関わった方々（特に若い人達）から、ぜひ現地へ行ってみたいという声が多くあがったからです。内容、応募条件については、次号でくわしくお知らせします。

また、事故のあった4月26日前後の時期にプレスタディツアーも企画しています。これへの参加者は、帰国後、スタディツアーの準備のための事務局業務のできる人が条件となっています。



わたしたちの涙で雪だるまが溶けた～子どもたちのチェルノブイリ～

## 最新情報 雪だるまニュース

### 小倉東高校生徒会が 15万円カンパ

この本を読んだ小倉東高校の生徒会長の坪谷光昭さんが生徒会に呼びかけ、体育祭の時にみんなで募金を集めてくださいました。どうもありがとうございました！

### 美術展にポスターを出展

福岡市の書店でこの本を手にしたグラフィックデザイナーの鎌田勝美さん（筑紫野市在住）がポスターにして福岡県展と二科展に出展してくださいました。鎌田さんは、両展の会員です。ポスターは、かざぐるまの4つの羽根に、それぞれ雪景色・飛ぶ鳥・りんごの木・ひまわりの写真で構成されており、チェルノブイリ事故や本の紹介もついています。福岡県展はバックが青、二科展はバックが赤で、このうち福岡県展に出展されたものをチェルノブイリ支援運動・九州に寄贈してくださいました。

このポスターも、貸し出しを行います。（すでに北九州の国際交流ウィークで展示しました。）ただし、事務所

まで取りにこれる方のみ。

### ラジオ佐賀の番組に

会員でラジオ佐賀に勤める平野さんが、ラジオ番組を作りました。3回に分けて放送されました。

### 学園祭でも

北九州の西南女学院高校の文化祭のクラス企画として3年S組が世界の時事問題のテーマの一つとしてチェルノブイリ問題を取り上げ、事故の説明や子どもたちが来日した時の写真を展示し、グランプリを受賞しました。募金も集めました。これは、作文集の編集に関わり、北九州での作文を書いた子どもたちの来日交流会に参加した安田さんや柳田さんが中心となって行ったものです。

### 夏休みの自由研究や感想文に

東京の集会に参加した得手里奈さんが夏休みの課題としてチェルノブイリのことをまとめました。とてもわかりやすくまとめており、事務局一同感心しました。

## 北海道教組が販売運動を

九州の本が北海道でもたくさん読まれることになりました。北海道教職員組合がこの本の普及を活動として取り組んでくれています。すでに500冊以上の注文が来ています。

## 記事にしてくれた

### 雑誌・ミニコミの紹介

週刊金曜日、友情通信（国際ペンフレンド協会）、元気ネットワーク（ネットワークさせぼ）、リビング北九州、ほんコミニケート、百万人の福音……皆さんの協力ありがとうございました。

★図書新聞の95年上半期読書アンケート（このアンケートは95年上半期に刊行された書籍の中から、各々の分野の執筆者の方々に印象に残った3冊をピックアップ、コメントを付していただいたものです。）に名取弘文さん（小学校教諭）が揚げてくださいました。

★「技術と人間」今週の本欄より抜粋

「チェルノブイリの原発事故から9年がたち、記憶はしだいに薄れていく。けれども被害を受けた人々の苦しみには終わりが無い。本誌先月号でベラルーシの医師がいていたように、「惨

事は1986年1年かぎりの惨事ではなく、5年10年の惨事でもなく、永遠につづく」のである。そのうえ甲状腺ガンなど放射線被曝による晩発障害は、浴びてから10数年後にあらわれるので、最悪の事態はむしろこれから起きるといってよい。

そのさい、もっとも心配されるのはこどもの健康だが、こどもたちはこの事故をどう受けとめたのか。こどもの生命を守れ、こどものために原発をなくせとさんざんいわれてはきたものの、こどもが自らの体験や考えを、自分自身のことばで語ることはなかった。本書はまさに、放射能汚染のいちばんひどいベラルーシ、ゆえに今後もっともひどい被害が予想されるベラルーシのこどもたちが綴った文集である。

…（中略）…

日本語版の50編は、日本の中高生が選んだという。草の根の、地道な支援活動から生まれた一書。」

## 原画展報告

☆多くの学校で原画展が催されています。その中で八代白百合学園高校の式町 弥生先生に様子を報告してもらいました。

「チェルノブイリの子どもたちの絵と写真展」として10月14日（土）、10月15日（日）、学園祭で展示しましたが、準備に携わった生徒たちは「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」

の作文集を読み、子どもたちの絵の心の声に、感受性をおおいに刺激されておりました。ただ単なる知識としてではなく、心の傷みを深く感じとり、核について考えさせられておりました。

日ごろは本を読むのが苦手という生徒も作文集に吸い寄せられたように真剣なまなざしで読み入り、感動しておりました。「特に詩がいい」と言っておりました。

ちなみに入場者は、2日間で600

名ほどでした。ほんとうにありがとうございました。

(八代白百合学園 式町 弥生)

只今 13,000冊

売れています。

まだまだたくさんの人に  
読んでもらいましょう！！

## 事務局より皆さまへ

広川隆一

「チェルノブイリと核の大地」

チェルノブイリ

10周年カレンダーについて

チェルノブイリの支援をしているチェルノブイリ子ども基金（東京都）が来年のカレンダーを作りました（くわしくはチラシ参照）。チェルノブイリ支援運動・九州でも販売の取り扱いをしています。

広川隆一さんは、チェルノブイリや核の大地の写真を撮り続けている写真家です。10年を迎えるチェルノブイリのことをいつも心にかけておくためにもこのカレンダーを家や職場に掛けることをお勧めします。暮れにかけての進物にも適しています。

代金

カレンダー	一部	1500円
送料（実費）	一部	390円
	計	1890円

（2部だと送料込みで3700円になります。多く注文する場合は、地域によって送料が変わりますので、事務局までご相談ください）

申込は、チェルノブイリ支援運動・九州の振込用紙を同封しておりますので、「カレンダー」と明記の上、代金を振り込んでください。

※ 郵便振込をしてから事務局に到着するまで一週間以上かかります。お急ぎの場合は、電話、ファックスであらかじめ連絡してください。

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」

ロシア語版を販売しています

ロシア語版は100編の作文が収録

されています。カンパ金を入れて  
3000円です。送料は1冊ですと  
310円になります。同封の振替用紙、  
または、事務所に直接お申し込みくだ  
さい。

※この本は、社会エコロジー同盟チェ  
ルノブイリがユニバーシアード福岡大  
会に出場するベラルーシ選手団に託し  
たものです。福岡市で選手団と事務局  
スタッフが対面し、日本語版とロシア  
語版の交換会を行いました。その後皆  
で体操の決勝の応援に行きました。

(ベラルーシには、五輪金メダリスト  
のシェルボ選手など、体操の有力選手  
がいます)

## 会計担当より

会計担当者が5月から8月の間、産  
休を取ったため、領収証の発行が遅れ  
てしまい申し訳ありませんでした。今  
今回封しておりますが、わからない点  
などありましたら事務所まで遠慮なく  
お尋ねください。

---

## ☆☆インフォメーションコーナー☆☆

会員さんから寄せられた情報を載せるコーナーをつくりました。チェルノブイリ  
のような悲劇を繰り返さないために、ぜひ皆さんに考えていただきたい情報です。

### @核実験反対ステッカーができました！

「私たちは核実験反対の意志表明をしよう！」と、脱原発ネットワーク・九州と  
九電消費者株主の会でオリジナルのステッカーをつくりました。玄関に車にバッグ  
に帽子に…工夫して色々なところにはりましょう。2枚1組で100円です。

### @核実験反対の意見広告を新聞に出そう！

フランスの核実験で使われた核弾頭に日本の原子力発電所で取り出されたプルト  
ニウムの一部が使われている疑惑があります。もしそうだとしたら私たちも核実験  
に手を貸したことになるのでは…このような事実を知ってもらうための意見広告  
を新聞に出そうという運動があります。募金として一口1000円です。

郵便振替 01760・8・15660 株主の会

01760・4・8156 脱原発ネットワーク九州

◇ステッカー・意見広告とも問い合わせ先は…

松下 竜一 (TEL/FAX 0979・22・1703)

清水 満 (TEL/FAX 0940・35・0866)

※支援運動・九州事務局にもステッカーや意見広告のチラシを置いています。

---

Беларускі  
сацыяльна-экалагічны  
саюз "Чарнобыль"

220002, Рэспубліка Беларусь,  
г. Мінск, Крапоткіна, 44  
Тэл. (375172) 34-15-53,  
Факс: (375172) 71-58-19  
E-mail: sasha@by.glas.apc.org



Belarussian  
Socio-Ecological  
Union "Chernobyl"

Republic of Belarus,  
220002, Minsk, Krapotkina str., 44  
Phones. (375172) 34-15-53  
Fax: (375172) 71-58-19  
E-mail: sasha@by.glas.apc.org

А К Т

"27" сентября 1995 г.

г. Минск

Мы, нижеподписавшиеся, составили настоящий акт о том, что Движением помощи Чернобылю о.Кюсю /Япония/ передана сумма денег в количестве 50000 долларов США /пятьдесят тысяч долларов/ Белорусскому социально-экологическому союзу "Чернобыль" в качестве благотворительной помощи на развитие Молодежного реабилитационного центра "Кюсю-на-Свислочи".

Деньги в сумме 50000 /Пятьдесят тысяч/ американских долларов передал:

Руководитель делегации

Движения помощи Чернобылю (中村隆市 /Руиши Накамура/



Деньги принял:  
Президент БелСоЭС  
"Чернобыль"

/Василь Яковенко

※「チェルノブイリ支援運動・九州がペラルーシ社会エコロジー同盟チェルノブイリに対し、サナトリウム・九州への慈善援助として50000米ドルを  
け渡しました」という証明書です。

# チエルノブイリの子供たち 支援団体の招きで来日



チエルノブイリ原発事故で被災したベラルーシの子供たち四人が、北九州市の市民団体「チエルノブイリ支援運動・九州」（篠江寺代表）の招きで来日。三日、福岡市を訪問し、村山善雄市長の「様ほくといらま」通の悲劇を持った日本とベラルーシの遭難をこの手紙を送った。

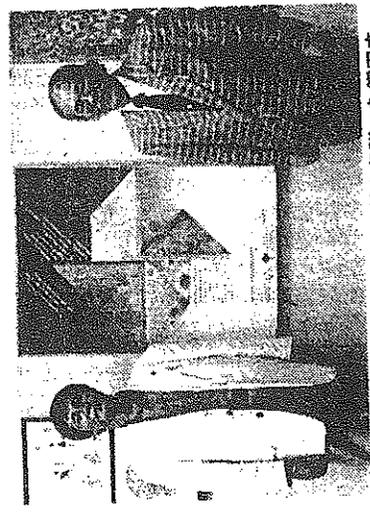
来日したのは、オレガ・ジエチョクさん（八エ）、レナ・メリニチエニコさん（七）、ドクトル・ブイソフ（五）、マリエドミラ・チユチクさん（四）。

四人は、福岡県内の広島市東区事務所を訪れて絵を贈ったあと、絵本作家の葉

祥明さん（四）と東京・銀座のスペースで対面した。葉さんは、「一々来日運動・九州」が四月末に日本へ来日して出版したベラルーシの子供たちの作文集「わたしたちの涙で書きたまが」を渡した。子どもたちの「チエルノブイリ」の絵本などを無償で贈っており、「放射能は心と体に伝えないことを願ったが、四人はそれを覚え、生き生きとしていた」と感動した。

四人は十二日までの滞在期間中、福岡、北九州市などを訪れ、日本の子供たちと交流する。ドクトルは、「悲劇を繰り返さないため、日本の同じ世代の人たちと考えたい」と話していた。

読売新聞 1995.8.4



「子どもたちのチエルノブイリ」を贈った藤田さん（右）と受け取った深江事務局長

## チエルノブイリ原発事故で被災した子供たちの作文集に贈られた筑紫野市在住のチエルノブイリが一日、作文集を発行した市長グループ「チエルノブイリ」の支援団体の招きで来日

「子どもたちのチエルノブイリ」を贈った藤田さん（右）と受け取った深江事務局長

支援運動・九州（約二千五百人に寄贈された。作文集は、今年十月に出た。わたしたちの涙で書きたまが（祥明）千三百冊。同市谷明院のグラフィックデザイン科生員、藤田勝義さんが偶然、書店で見つけた作文集を感銘。『もっと多くの人に知ってもらいたい』と作文集をイラストしたポスター（縦一〇三センチ横七三センチ）を制作して届けた。うち一枚を、百まで福岡市の県立美術館で開かれた「チエルノブイリ支援運動・九州」に寄贈すること

した。八人の絵にまよって贈られた葉集を手もたおみはくし、考えさせることができることになった。田さん、葉集を受けた「チエルノブイリ支援運動・九州」の篠江寺事務局長は、「手紙は多数頂いたが、これは初めてで感動している。子供たちの作文が良かった証拠」と話している。作品は今月、八日北九州市八幡東区立野の国際交流センターにある国際交流館の展示場で展示される。

毎日新聞 1995.10/2

95.10.5 A

# 生徒会の被災見聞録

小倉東高



## 出版先に託す 悲惨さつづつた 作文集読み提案

チエルングイリ原葬事  
故で被災した子どもたち  
の作文集「わたしたちの  
涙を曇らせるまが穂けた  
子どもたちのチエルング  
イリ」で事故の悲惨さを  
知った県立小倉東高(小  
倉区国原五丁目)の生  
徒会が、被災した子ども  
のために、生徒会に募金  
を呼びかけた。集まった  
約十五万円は四日、同校  
で、出版元のチエル  
ングイリ多摩運動・九州  
の代表者に手渡された。

生徒会長の三年生、柳谷  
光昭君とこの夏休みに  
作文集を眺めたのがきっかけ。一九八六年四月の阪神  
事故当時小学生で、一書  
故のことは作文集を眺ま  
で知らなかったが、被災  
地に胸を求めいかざるを  
得ない親、弱弱に体をむ  
しはまれながら親を助る子  
の心情をこぼし、何か  
できないかと募金を思い  
立ったという。

生徒会は昨年、ボラ  
ンティアの募金活動を始め  
ていた。昨年は東蘭ツシ  
の子どもたちの学費に、と

二二万に達した。今年も  
既谷君の提案で、チエル  
ングイリの被災児を対象とす  
ることが決まった。九月  
七日の体育大会、生徒会  
父母らに協力を呼びかけた  
ところ、一平君を連れた  
十四万八千六百四十五円が  
集まった。

募金を受け取った二平  
運動・九州の深江守代  
会長は「生徒会からの呼  
びかけで募金をしてくれ  
たのは初めて。来春に再  
地蘭を運り出す際、假  
してたい」と感謝してい  
た。

「多摩運動・九州」は九  
〇年に結成。九年、阪神  
事故で大きな被害を受けた  
ベラルーシ共和国の青森  
ンヌ市部分に、地蘭の家  
団体を協力して地蘭を  
施設をつくれた。毎年、現  
地蘭団体の派遣を協賛し  
て提供などの活動を行っている。

作文集には、ベラルー  
シの年代の子どもたちの  
経験など五十編が収録され  
ての書籍。これまで一  
二万部が売れたという。

被災地長崎で  
市民らと交流  
ベラルーシの子供たち  
四日、チエルングイリ  
原葬事故で放射能汚染した  
ベラルーシ共和国で被災し  
た子供たちと被災地・長  
崎の市民らとの交流会が五  
日、長崎市の県勤労福祉会  
館であった。

参加したのはオブリカ、シ  
エチエツクさんらと日本  
の中、高校生に当たる男女  
四人と同国の民間救済組織

・社会三ロケット問題の  
シリ、ヤコベンコ嬢。  
風通しセンター見学な  
その後、市民約四十五人と  
交流会。ヤコベンコ嬢は  
これまでの日本側の救済運  
動の支障継続を憂慮。子供  
たちは、被災当時の状況  
や交遊と死について語り合  
う様子など健康への不安、  
事故再発防止などを訴えた。  
地元参加者から来崎の感  
想を聞かれたリエツミラ、  
チエツクさんらには「チ  
エルングイリ事故のような

不幸な出来事が日本にもあ  
ることを知り気が爽にな  
った。

大府高校三年の高山幸子  
さん(左)は被災記者になり  
たいという同じ夢を持つシ  
エチエツクさんに、文壇を  
始めたいと英語で申し込  
み交流の約束をしていた。

市民との交流会を盛り上げる(手前)と感謝するベラルーシの子供たち 長崎市役所の県勤労福祉会館



長崎朝日新聞  
1995.8/6

●チェルノブイリ支援運動・九州 第6回総会●

# 10年目をむかえた

# チェルノブイリ

## ■第1部 現地調査報告

と き 12月10日(日)

午後14:00~15:00

午後14:00~16:00

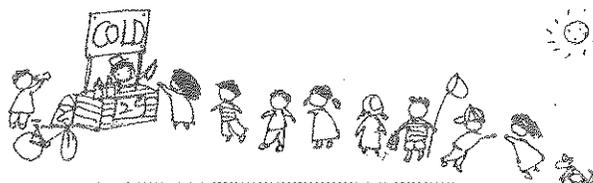
報告者 **中村 隆市**  
(第5次調査団団長)

ところ **国際村交流センター会議室**

北九州市八幡東区平野1-1-1  
TEL 093-661-8866

今回は、「支援運動・九州」の総会の前に、9月23日~10月1日にベラルーシ現地に行ってきた調査団の報告を行います。

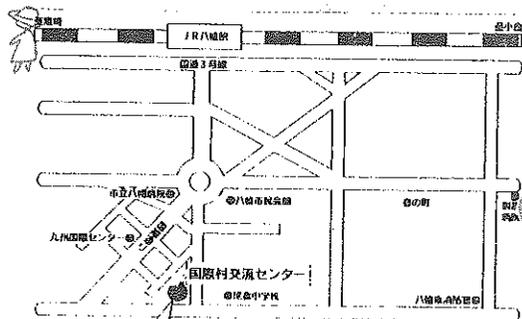
内容・ビデオ上映/医療の現状/  
サナトリウム九州について



## ■第2部 第6回総会

午後15:00~16:00

これからのチェルノブイリ支援や、チェルノブイリ支援運動・九州の活動内容について、意見を交わしましょう。



駅より徒歩10分/駐車場260台収容

★ どなたでも参加できます ★

総会終了後、場所を変えて交流会を行います

主催

チェルノブイリ支援運動・九州

連絡先

北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号 チェルノブイリ支援運動  
(TEL/FAX 093-681-1780)